

として懐かしいばかりでなく、分子軌道法、分子の対称性をもとにして、スペクトルの基礎から応用までが実に分かりやすく書かれており、目からうろこが落ちたという気分させるのに十分の本であった。

Orchin と Jaffe (ヤッフエと読む) は他にも二人で同種の本を書きしており、小冊子ではあるが、"The Importance of Antibonding Orbitals" という本も面白く、最近私の研究室で輪講に使ったことがある。

思い出に残る本としてもう一冊あげると、

2. F. A. Cotton, "Chemical Applications of Group Theory", Interscience Publishers

がある。群論という敬遠したくなる問題を、まるで推理小説を読むように読ませてくれたのであるが、毎晩寝床の中で夢中になって読んだものである。

大学受験のときは英語の読解力をつけようと、短編ではあるが、推理小説 (Detective stories) をよく読んだ。そのなかで、最も印象に残っているのは、

3. Daphne du Maurier, "The Birds" (Alfred Hitchcock presents: 14 of My Favorites in Suspense に収められている)

である。ヒッチコックが映画化した「鳥」の原作であるが、映画も面白かったが、この37頁ほどの短編小説は私の貧しい英語力を以てしても不気味さがひしひしと感じられる小説であった。

次に私の好きな推理小説を何冊かあげてみたい。

4. 岡本綺堂「半七捕物帳」光文社時代小説文庫

5. 坂口安吾「安吾捕物帖」ちくま文庫

6. アイザック・アシモフ「黒後家蜘蛛の会」創元推理文庫

7. ロアルド・ダール「あなたに似た人」ハヤカワ文庫

切りがないので、とりあえずこの位にしておくが、4の岡本綺堂は私の最も好きな作家の一人で、「半七捕物帳」は何回読み返したかわからない。他にも多くの怪談や随筆を書いているが、本屋に出るものはすべて買うことにしている。

「半七捕物帳」が幕末期の江戸の風俗が楽しめる

のに対し、5の「安吾捕物帖」は文明開化の頃の東京が生き生きと書かれている。20話からなる短編集であるが、そのすべてに同じ趣向が取り入れられている。事件が起こる度に、すでに第一線から退いた勝海舟が尤もらしい推理をして解決したかに見えたとき、洋行帰りの若き探偵結城新十郎が鮮やかに犯人を見つけ出し、最後は勝海舟が負け惜しみを言うという、坂口安吾独特の冗談が大変楽しい。

6の「黒後家蜘蛛の会」も同様の趣向が使われている。黒後家蜘蛛というのは、雌蜘蛛が連れ添った亭主蜘蛛を殺してしまうという蜘蛛だそうだが、その名前をとった食事会のメンバーは弁護士、暗号専門家、作家、化学者、画家、数学者という設定であり、いずれも推理好きで、誰かが未解決の事件を紹介する。それを他の誰かが自分の専門知識を生かして推理するのだが、必ず最後に解答を与えるのがそれを聞いていた給仕のヘンリーという皮肉な趣向になっている。どの話も科学者アシモフの面目躍如といったものばかりで、大変楽しめる。

7のロアルド・ダールも私の大好きな作家である。他にも「少年」「単独飛行」といった自伝風の小説もあり、ダールの生き方にはなぜか共感を覚える。最近生協で7の原書 (Roald Dahl, "Someone Like You", Penguin Books) を売っていたので買ったが、昔のような元気がなくなっているためか、まだ読んでいない。

エントロピーとコンパクト集合

最上 善広

1. Gordon M. Barrow (藤代亮一訳)「物理化学」東京化学同人

大学に入って学んだことの中で、とにかく分からなかったものが2つあった。「エントロピー」と「コンパクト集合」。そのころ我々の間では、訳の分からないことを言う奴を「エントロピーみたいな奴だ」とか、「彼の言うことはコンパクト集合すぎて分からない」と言うような使われ方をしていたこと

を記憶している。

コンパクト集合はついに分からず終いだったが、エントロピーについてはこの教科書のお蔭で何とかなった。「書物は始めからじっくりと、何回か読むと、いずれ理解できるようになる」ということを教えてくれたのもこの教科書。Peter W. Atkins の「エントロピーと秩序—熱力学第二法則への招待」(米沢富美子・森弘之共訳、日経サイエンス社)と併せて読むと、エントロピーというものがより身近に感じられるかも知れない。それは、カオスや複雑系といった新たな科学のパラダイムへの序章である。

手元に置く本として

仲西 正

1. 松田徳一郎編集代表「リーダーズ英和辞典(第2版)」研究社, 1999.

学生時代から、英語で書かれた論文や教科書を読むために様々な英和辞典を使ってみたが、最近はこの辞典に落ち着いている。この辞典の特徴は、科学技術用語、新しい言葉、そして固有名詞に詳しいことであると思う。最近20年ほど、日本の学習英和辞典は確かに進歩し、文法的な記述や例文に不足を感じることはなくなった。しかし、論文などの専門語を学習辞典で調べると当然ながら載っていないことが多く、他の専門分野の辞典で調べる必要が出てくる。数冊の辞書を使い分けるのは、なかなか大変であったのだが、リーダーズ英和辞典を使い始めてから、これ一冊で間に合うことがほとんどである。また、この英和辞典は訳語のみを示すのではなく多くの語について簡潔な内容説明もついているので助かる。例えば、isotactic を引くと「主鎖に対して側鎖が同一方向にのみ配位した、…」とある。値段が多少高いが、どなたにも薦められるよい辞典である。

2. 千原秀昭・徂徠道夫編「物理化学実験法(第4版)」東京化学同人, 2000.

恒温槽の作り方や簡単なガラス細工などに始まり、温度測定、分光学的測定、熱分析、真空実験などな

ど、物理化学実験は非常に多岐にわたる内容を含んでいるのだが、その基礎技術は、有機化学などと比べると、本にまとめられているものは少ないように思われる。紹介した本は、化学系学生のための物理化学実験のテキストである。初版は1968年だが、改訂が行われ、内容は現代的になっている。この本の優れた点は、実験を行うに当たっての操作から解析までをきわめて詳細に記述していることである。これらの記述は自分で実験をデザインしたりする場合に大変に参考になる。学生実験として37テーマを取り上げているが、研究者となっても役に立つ内容が多い。物理化学また定量的な実験を行う学生には是非に薦めたい本である。

生化学を楽しく学ぶために

藤原 葉子

大学で初めて生化学を学んだときに購入した教科書は、コーンスタンプの生化学という私が買った教科書の中でもっとも値段が高く、重量もあり、持ってくるだけで大学生になったような気がするものだった。当時教わった生化学は、有機化合物としての色合いが強く、分子模型を組み立てて構造をみたり、酵素反応も有機化学反応のひとつとして詳細に説明されたりしたので、もともと有機化学の苦手な私には取り立てて魅力のある分野というわけではなかった。卒業後思いがけず生化学とつきあうことになったが、この分野の日々の発展は目を見張るものがある。教科書も5年もたてば内容が古くなってしまっているので、次々に改訂されていく。そのような毎日の新しい発見に、わくわくしながら現在進行形でついていけるのが、今の生化学の楽しさなのではないかと思う。最近の教科書は図も美しく非常にわかりやすいので、面白く読んでいくことができると思う。

1. シンプル生化学 南江堂

昨年生化学の教科書を執筆するときに、これだけのページ数にもかかわらず、コンパクトにわかりやすく、必要なことがかなり高度なことまで全部書か